

古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について

—— 「岩はしる垂水」を中心に ——

黄 當 時

〔抄 録〕

古代日本語の船舶の名称やそれに由来する語彙には、日本語一視点のみでは正確に理解できないものがある。これらの単語には、適切な海の民の視点、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識を持てば正確に理解できるものがある。

茂在寅男氏は、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、井上夢間氏は、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、ハワイ語を用いて簡潔に説明したが、その知見は、言語面からの研究に突破口を開くものであった。

「石/岩」は「^{イワ}石/^{イワ}岩」(磐) (IWA=Frigate or man-of-war bird、軍艦鳥)であること、「垂見/垂水」は「^{クル}垂-見/水」であり、「垂」(taulua、双胴船)を見かけるところ/^{クル}「垂」がいる水域であること、などを解明した。

古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、中国語やポリネシア語等の外国語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

キーワード 石/岩/磐、垂見/垂水、手/田/多、船舶、カヌー

1. はじめに

『万葉集』1418の歌に、

しきのみこよるこびみうた
志貴皇子の権¹の御歌一首
いはしる²たるみ³うへ⁴のさわらび⁵も
石はしる²垂水³の上のさ蕨の萌え出づる春になりける⁴かも

があり、中西進1980は「1新春の賀宴に祝意を述べる趣で題詠された歌。卷十三巻頭歌と同種。2激流の形容。3滝のこと。普通名詞。4発見の意がある」と語句に注を付し「岩の上をほとばしる滝のほとりのさ蕨が萌え出る春に、ああなったことだ」と口語訳している (p. 167)。

原文は、石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔 成来鴨。（同書 p. 167）

石^{いは}ばしるは、名詞+動詞の構造である。

仮に、名詞で示される場所/空間で（何かが）動作をしている、と取れば、文中にその「何か」が見当たらなければ、前後関係でその「何か」を補うことになる。このケースで言えば、石（という場所・空間）をはしる、の意と取ると、動作主の「何か」は、言葉としては明示されていないため「水」でも補い「石（という場所・空間）を水が流れる」と理解するしかない。

ところで、わらび（蕨）は、山地の日当たりのよい乾燥地に群生するシダ¹⁰¹、であるが、滝（それも水量の多い滝）の近辺は、わらびには、湿度の高さ（そして恐らく気温の低さ）で生育に適した環境ではなかろう。中西進1980が言うように、そこには、実際に、滝があったのであろうか。「滝」は、歌の中に全く登場しないが、垂見（垂水）を「滝」と考えて良いのであろうか。垂見（垂水）は、文字通り、垂見（垂水）ではないのだろうか¹⁰²。志貴皇子が目にしたさわらび（早蕨）は、どこか日当たりのよい乾燥地に群生していたのではないのだろうか。さわらび（早蕨）の近辺に「滝」があったのであろうか。志貴皇子は、「滝」を目にしたのであろうか。

また、石^{いは}ばしる、には、石（と石の）の間を（水が）流れる、というような場面の描写ではあっても、石（岩）の上を（水が）ほとばしる、というような場面の描写にはなるまい。歌の意味が正確に取れないまま何とかつじつまを合わせようと、垂見を垂水に書き改め、字形（垂水）が示唆する意味で解けた気分になっているだけであることに気付いていないのではないだろうか。

一方、名詞+動詞の構造では、名詞は、その直後の動詞の動作主であるのが一般的であり、特に、前述のような、名詞で示される場所/空間で（何かが）動作をしている、という解釈が怪しさ・疑わしさを漂わせていると、志貴皇子がこの意味/用法で歌を詠んだ可能性も検討しなければならなくなってくる。

慎重な情報解析では、担当者は、解析が可能かどうか、意味が取れるかどうか、という予想や判断にかかわりなく、名詞+動詞の構造には、「名詞」が「動詞」した、と、「名詞」（という場所/空間）で（何かが）「動詞」した、との二つの可能性がある、という認識を持たなければならない。このケースで言えば、志貴皇子は、石がはしる、石（と呼ばれる物体）が横方向にある程度の速度で移動する、という意味で歌を詠んだ可能性がある、という認識を持たなければならないのである。

「石はしる」は、この歌が詠まれた頃の人々には理解が難しい言葉ではなかったはずなのに、後世の人々には何故怪しさ・疑わしきの残る解釈しかできなくなったのであろうか。後世の人々は、言語の面で、その頃の人々と同程度の知識がないために、その頃に書かれたものが正

確に理解できない、という可能性があるが、如何であろうか。「石はしる」は、その一部がいわゆる海の民の言語であり、私たちを含め、後世の人々は、海の民の言語についての知識がないために、その意味が正確に理解できない、という可能性があるが、如何であろうか。私たちを含め、後世の人々は、自分が想像するほど海の民のことを知らない可能性があるが、如何であろうか。

陸の民の私たちには、いわゆる海の民のことについて判断する能力や知識が欠けているかもしれないが、私たちの視点を、いわゆる海の民の視点にもう少しでも近づけることができれば、解析対象を見極める能力や解析に必要な知識は、入手可能ではないだろうか。いわゆる海の民の視点とは、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識ということになる。

小論では、管見に入った有用な知見を手掛かりに、必要にして十分な程度の海の民の言語や文化に関する知識を入手しつつ、言語学的視点から、「石はしる」の読みと意味を探ってみたい。

2. 有用な知見

2-1. 枯野、軽野

解析の手掛かりは、海の民が用いたであろう言語であるが、取り敢えず、船舶の名称について考察しつつ、解析に必要な知識（装備）を少しばかり入手しておきたい。

古代日本語における船舶の名称については、言語学的視点からの研究は貧弱で見るべきものがほとんどないが、僅かに二人の研究者が「枯野」船解明の過程で示した知見が有用と思われる。

先ず、茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『古事記』や『日本書紀』が成立した頃は、ある種の高速度船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたもので、その当て字として「枯野」（『古事記』）、「枯野、軽野」（『日本書紀』）が使われたのではないかと推論している²⁰¹⁾。現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後にカリブ海の原住民から伝えられたアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う。そして、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった²⁰²⁾。その説は、重要な問題提起ではあったが、それ以上の知見が出てこなければ、面白い考えた、で終わってしまうものであった。

次いで、井上夢間氏は²⁰³⁾、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、種々の事例を紹介しつつ、基本的に重要なことがらを次のように簡潔に説明している²⁰⁴⁾。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌーは、一般的にはハワイ語で「ワア、WAA」と呼ばれます（ハワイ語よりも古い時期に原ポリネシア語から分かれて変化したとされるサモア語では「ヴァ、VA'A」、ハワイ語よりも新しい時期に原ポリネシア語から分かれたが、その後変化が停止したと考えられるマオリ語では「ワカ、WAKA」）。しかし、カヌーをその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」と呼び、双胴のカタマラン型のカヌーを「カウルア、KAULUA」（マオリ語では、タウルア、TAURUA）と呼びます。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キッチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、「かるの」は、ハワイ語の

「カウ・ラ・ヌイ」

KAU-LA-NUI (kau=to place, to set, rest=canoe; la=sail; nui=large)、「大きな・帆をもつ・カヌー」

「カウルア・ヌイ」

KAULUA-NUI (kaulua=double canoe; nui=large)、「大きな・双胴のカヌー」の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の

「カウ・ヌイ」

KAU-NUI (kau=to place, to set, rest=canoe; nui=large)、「大きな・カヌー」の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の知見は、従来不明であった事柄を言語学的に解明したもので、私たちの研究に突破口を開くものであった。氏の画期的な知見により、私たちは、言語学的な根拠を持って古代日本語における船舶の名称について考察することができるようになったのである。氏の知見が私たちの研究の新たな礎となることは、間違いない。ここに引用した知見は、古代日本語にお

る船舶の名称の解明にとって極めて重要な視点/手掛かりであり、今後の研究に大きく寄与することであろう。

2-2. 『万葉集』の船

寺川真知夫氏が『万葉集』の一部の船について、次のように簡潔にまとめているので²⁰⁵⁾、井上氏の説くところを手掛かりにして、考察を加えておきたい。

……『万葉集』の巻二十に伊豆手夫禰(四三三六)、伊豆手乃船(四四六〇)と二例伊豆国産の船が詠まれており、奈良時代中期には大阪湾に回航され、使用されていたことが知られる。その船は伊豆手船すなわち伊豆風の船と呼ばれているから、熊野船(巻十二、三一七二)、真熊野之船(巻六、九四四)、真熊野之小船(巻六、一〇三三)、安之我良乎夫禰(巻十四、三三六七)などと同じく、何らかの外見上の特徴を有する船であったに違いない。この四三六六の歌では「防人の堀江ゝ漕ぎつる伊豆手夫禰」とあるから、これを防人の輸送と解し得るなら、その特徴は大量輸送の可能な大型船ではなかったかと思われる。

以下、順を追って検討してみることにしよう。

先ず、(四三三六)と(四四六〇)の歌は、次の通りである。

巻第二十(四三三六)²⁰⁶⁾

防人の 堀江ゝ漕ぎ出る 伊豆手船 梶取る間なく 恋は繁けむ

巻第二十(四四六〇)²⁰⁷⁾

堀江ゝ漕ぐ 伊豆手の舟の 梶つくめ 音しば立ちぬ 水脈速みかも

異文化の語彙(外来語)を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意識の二つの方法がある。

中国語では、いずれも漢字で表記するが、音訳してみたもののこれではわかりにくい、と考えられる場合、さらに類名を加えてよりわかりやすくすることがある。特に、音節数が少ないものは、よりわかりやすく安定したものにするために、この手法を採ることが多い。

例えば、beerやcardという単語は、「啤」や「カ」という訳で、一応、事足りており、特に単語の一部であれば、問題はない(例:扎啤、〔ジョッキに入れた〕生ビール; 信用卡、クレジットカード)。ところが、「啤」や「カ」だけで一つの独立した単語となると、やはりわかりにくさは否めない。そこで、類名の「酒」や「片」を加えて、「啤酒」や「卡片」とするのである。

「異文化の語彙(外来語)+類名」という、現代中国語に見られるこのような表記法は、古

代日本語にも見られる。「手」や「手乃」という訳で、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「夫称」や「舟」という類名を加えて、「手夫称」や「手乃舟」としたのである。

歌人が見たものは、いずれも全称が「手乃」と呼ばれた船と考えてよいであろう。表記の違いは、(四四六〇)では、全称の「手乃」をそのまま使うことができたが、(四三三六)では、音節数の制約により一音節少ない略称の「手」を用いた、ということから生じている。もちろん、逆に、(四三三六)で略称の「手」で詠まれた船は(四四六〇)では、音節数の制約を受けることなく「手」に「乃」を後置した全称の「手乃」で詠まれている、と見なしても一向に差し支えない。

いずれの見方をするにせよ、全称の「手乃」は二音節であり、一音節少ない略称にするには、前置要素「手」を略して後置要素「乃」を残すか、後置要素「乃」を略して前置要素「手」を残すか、の二つの選択肢しかない。実際には、後置要素「乃」は略せても（前置要素「手」が略称として残る）、前置要素「手」は略せない（後置要素「乃」が略称として残ることはない）。全称の「手乃」と略称の「手」は、修飾語を被修飾語の後に置くという、表層の日本語には見られない語法構造の存在を示している。

ありふれた言説であるが、言語は多重構造である。

例えば、女性の名前に、菊乃(野)、雪乃(野)、幸乃(野)、綾乃(野)、等がある。名付け親は、女の子に付けるのにふさわしい名前、というくらいの意識や知識しかなく、乃(野)を付さない、菊、雪、幸、綾、等との違いは、わかっていないであろう。このことは、学者、研究者でも同じで、乃(野)の有無に意味の違いがあることは認識していないし、また認識できず、一文字多い/少ない、一音節多い/少ない、というくらいのことしか説明できないのではないだろうか²⁰⁸⁾。

人名の乃(野)は、古代日本語とポリネシア語とのつながりを示す言語的痕跡であるが、今日まで受け継がれており、心理の深層では過去の言語習慣（慣習）に基づく一種の「慣習法」が支配しているのではないか、と思わせる例である。

小島憲之、木下正俊、東野治之1996では、「手」の漢字に「て」のルビを振って「手^て」としているが、「手^て」は、「手」の正確な意味がわからないまま無難な訓みを取り敢えず一つ当てただけ、という可能性はないのだろうか。慎重な解析では、歌人が「手^た」と詠んでいた可能性を排除することができない。「手」には、た行音の場合、「た」と「て」の二音があり、実際のところ、時代差や地域差さらには個人差により、「た」を書き記すのに用いられたり「て」を書き記すのに用いられしたりしていた、と考えてよい。このケースでは、歌人が「た」と詠み「手」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、むしろ高いのではないだろうか²⁰⁹⁾。

次は、(三一七二)、(九四四)、(一〇三三)の歌である。

卷第十二 (三一七二)²¹⁰⁾

浦廻漕ぐ 熊野船着き めづらしく かけて偲はぬ 月も日もなし

卷第六 (〇九四四)²¹¹⁾

島隠り 我が漕ぎ来れば ともしかも 大和へ上る ま熊野の船

卷第六 (一〇三三)²¹²⁾

御食つ国 志摩の海人ならし ま熊野の 小船をに乗りて 沖辺漕ぐ見ゆ

(一〇三三)の「真熊野之小船」は、(三一七二)の「熊野舟」や(〇九四四)の「真熊野之船」とともに、ある同じタイプのもを指している、と考えられる。つまり、(一〇三三)の「小船」は、「小」という情報を明示しており、(〇九四四)の「船」と(三一七二)の「舟」は、音節数の制約により「小」を略してはいるが、(一〇三三)の「小船」と同じもの、と理解してよい。

最後は、(三三六七)の歌である。

卷十四 (三三六七)²¹³⁾

百つ島 足柄を小船 あるき多み 目こそ離るらめ 心は思へど

先の例と同じく、これらの単語も「異文化の語彙(外来語)+類名」という表記法で書き記されている。「小」や「乎」と訳して、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「船」や「夫祢」という類名を加えて、「小船」や「乎夫祢」としたのである。

小島憲之、木下正俊、東野治之1995aでは、「真熊野之小船」の「小」に「を」のルビを振って「小を」とし、同1995bでは、「安之我良乎夫祢」の「乎」に「を」のルビを振って「乎を」としているが、「小/乎を」は、海の民の言語や文化についての知識を欠くために、「小船を」や「乎夫祢を」の正確な意味がわからず²¹⁴⁾、取り敢えず接頭語か形容詞と見なして「を」の訓み一つ当てただけ、という可能性はないのだろうか。慎重な解析では、歌人が「小/乎を」と詠んでいた可能性を排除することができない。「小/乎を」には、「を」と「こ」の二音があり、実際のところ、「を」を書き記すのに用いられたり「こ」を書き記すのに用いられたりしていた、と考えてよい。熊野の「小船を」と足柄の「乎夫祢を」は、ともに「こぶね」と詠まれたものを書き記した可能性があるのではないのだろうか。

歌人はある船を「を」と詠み「小/乎を」と書き記した、と考えるだけでは、重大な事実誤認をする可能性がある。歌人がある船を「こ」と詠み「小/乎を」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、このケースではむしろ高いのではないだろうか。確かに、お遊戯、お散歩、

や、おみかん、おりんご、のように、おふね、と言うことは可能ではあるが、歌でも会話と同じような頻度でそう詠むものなのか、使用頻度は男女とも同じなのか、話し手と聞き手の地位や年齢層による言い方や詠み方の違いはないのか、「おふね」以外にはどのようなケースがあるのか、などを考える必要性もあるのではないだろうか。

この文字表記から確実に言えることは、「小/乎」は「を」もしくは「こ」を書き記した（「を」もしくは「こ」の音声を示している）ということだけである。「小/乎」の訓みは「を」一音しかない、と考えるのは、無邪気に過ぎるが、「小/乎」は、考え得る訓みの一つであるのみならず、古代日本語における船舶名称を研究する上で極めて重要な意味を持っている。学者であれ研究者であれ、古代日本語の中に「こぶね」（或いは「こ」と呼ばれた船が存在した可能性がありそうだ、という認識を頭の片隅に置くとよい。

このケースでは、歌人は「小」や「乎」を表音に用いたのであり、表意に用いたのではない、と考えてよい。（三三六七）の原文のように、「乎夫祢」と表記されていれば、字面から舟/船の大きさを連想することはない。ところが、「小舟」と表記されていると、当て字に過ぎないということがわかっていけばよいが、人々が、つい、字形に引かれて、単に「サイズが小さい船」と取ってしまうも無理はない。語感の極めて鋭い一部の人が腑に落ちないと思うことがあっても、漢字の絶大な表意力の前に、「小」と書いてあるから小さいと考えるしかない、と不審の思いを喪失してしまうのである。

それでは、「手」「手乃」と「小/乎」は、いずれも船を意味する異文化の語彙（外来語）を音訳したもの（書き記したもの）ということになるが、一体どのような言葉に由来するのだろうか。先に引用した井上氏の知見から推測すれば、「手」は「tau」を、「手乃」は「tau-nui」を、そして、「小/乎」は「kau」を書き記したものであろう。

大型のカヌーと言いたければ、確かに、「手乃（tau-nui）」が正確な表現である。しかし、実際には、寺川真知夫1980が、大量輸送の可能な大型船ではなかったか、と推測するように（p. 142）、（四三三六）の「手（tau）」は（四四六〇）の「手乃（tau-nui）」と同じ大型船を意味しており、大きいことを明言する場合を除き、「手（tau）」だけでカヌー一般を指したはずである。それは、今日、カヌーという言葉が大小を問わずに使えるのと同じような状況である。このことは、「小/乎（kau）」についても同様であった、と考えられる。

言語現象として、伊豆では「手、tau」が使われ、熊野や足柄では「小/乎、kau」が使われていることは、注目に値する。それは、伊豆にはカヌーを「手、tau」と呼ぶ人々が、そして、熊野や足柄にはカヌーを「小/乎、kau」と呼ぶ人々がいたことを示しているからである。

これで、古代の日本の船舶には、後置修飾語の「nui、野/乃」を付す大型のもの（kaulua-nui、加良奴/加良怒/枯野/軽野；kau-nui、狩野²¹⁵；tau-nui、手乃²¹⁶）と、後置修飾語の「nui、野/乃」を付さず、大型のものから小型のものまで幅広く使用できるもの（tau、手；kau、小/乎）があったことがわかる。

3. 天鳥船、天鶴船、天磐船

『日本書紀』(神武天皇、即位前紀)に、「天磐船」が登場するが、同じ構造で言及される船が他に二船あり、考察の便宜上、天鳥船、天鶴船とともに取り上げたい。

『日本書紀』(神代下、第九段、一書第二)に「またお前が往来して海で遊ぶ備えのために、高橋・浮橋と天鳥船も造ろう」³⁰¹⁾とあり、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、「天鳥船」に「ここでは水鳥の船。鳥は他界(海は他界)と往来すると考えられていた」と頭注を付している(p. 135)³⁰²⁾。

この頭注は、「天」を解釈することなく、「天鳥」の二字で「水鳥」と解釈しているようである。「海は他界」というのは、陸の民の発想であり、海の民のそれではない。そのような視点からでは(その程度の知識(装備)しかないようでは)、恐らく、正確な理解につながる解釈はできないのではないだろうか。

次に、『日本書紀』(神代下、第九段、正文)に「そこで、熊野の諸手船に〔または天鶴船という〕、使者の稲背脛を乗せて遣わし、高皇産霊の勅を事代主神に伝達し、またその返事を尋ねさせた」³⁰³⁾とあり、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、「天鶴船」に「天上を鳩のように早く飛ぶ意。「鶴」は享和本『新撰字鏡』に「也万波止」。記は天鳥船神を遣わす」と頭注を付している(p. 117)。

鶴は、鳥類の中でもさして速く飛ばないため、飛行速度が速いという比喩に用いるのには、適当ではなかろう。海の民は、実際には、私たちにわからない何か重要な理由で鶴を用いていた可能性があるのではないだろうか。小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994に限らないが、鳥類についての知識が、恐らく、あまりないままに、字面に基づいて何かしら書いておこう、という程度の発想で解釈を施したのではないだろうか。この点については、『日本国語大辞典』の編者も同じことであろう³⁰⁴⁾。

さらに、『日本書紀』(神武天皇、即位前紀)に「すると、『東方に美しい国があります。四方を青山が囲んでいます。その中に、天磐船に乗って飛び降った者がおります』と言った」³⁰⁵⁾とあり、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、「天磐船」に「天上界の磐のように堅固な船」と頭注を付している(p. 194)³⁰⁶⁾。

「天」を「天上界」と解釈しているが、この解釈で正しいのであろうか。磐船は、磐の船という意味であって、磐の・・・・堅固な船という意味ではないのではないだろうか。また、(不思議なことだが、鉄で造られた船は水に浮かんでも)岩石で造られた船が水に浮かぶことはないので、岩石を船の堅固さの比喩に用いるのは、第二例の、鶴が速く飛ぶ、以上の不自然さを覚えざるをえないが、如何であろうか。

以上のように、「天鳥船」、「天鶴船」、「天磐船」の「天」は、他界、天上(界)と解釈されている。天上(界)は、体積が相当大きい物体でなければ、地上からはその動きが視認できない空間であり、他界は、行けば同じ肉体では帰って来られないはずの空間である。これは、鳥も例外ではない。解釈者は、解釈対象が一体どういうものなのかが今一つよくわからないのではないだろうか。字面だけを頼りに単なる憶測で解釈をしているということはないのであろうか。「天」には、他界や天上(界)以外に、この三船に共通するような意味はないのであろうか。

また、鳥を水鳥と解釈したのは、単に、船が直後にあるからで、具体的な水鳥を想定しているわけではないのではないだろうか。磐は、やや異質なものに見えるものの、鳥や鶴に共通する何らかの意味を持っている可能性もありそうだが、そのようなものはないのであろうか。

4. 茂在寅男氏の知見

4-1. アマノイワフネ

茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げているが、天については、次のように述べている⁴⁰¹⁾。

……アマというのは、天、海の両方の意味にとれる、冠語的な形容詞であるといわれてきた。そして『日本書紀』の文脈のなかでは、それもいちおうはうなずける解釈であった。しかしこの場合、「天」という漢字からいったんひきはなして、AMAの発音だけで考えると、つぎのようなポリネシア語の意味が浮かびあがる。

アマ=カヌーのアウトリガーという腕木の先についている浮木。すなわちカヌーのアウトリガーについている縦方向の木。

AMA=Outrigger float; the longitudinal stick of the outrigger of a canoe.⁴⁰²⁾

アウトリガーのフロートというのは、カヌーの転覆をふせぐためにつけられた、かんたんな装置である。カヌー本体の横から何本かの細い腕木を出して、その先に、船型の浮木をつける。浮木の長さは、長いもので本体の八割にまで及ぶこともある。

なお「記紀」に「冠詞」として数多く出てくる天という言葉も、なぜこの場合だけアウトリガーと解するのか、という疑問も出るはずである。しかしカエルという言葉がゲコゲコ鳴く動物だけでなく、帰る、変える、の意味を持つこともある。どこの国の言葉にも、いくつか複数の意味をもつ同表音の単語、多義語が多数存在している。

この事情は現代も古代も、さほど変わりが無いであろう。さらにアマノイワフネの場合、とくに海または船に強く結びつく点で、AMA=アウトリガーの浮木説を採用しても無理ではないと思うのだが、いかがだろうか。

アマについては、茂在氏の推論が成立すると考えてよい。

私たちは、つい、漢字の表意機能に目を奪われ、自由に思考することを止めてしまいがちである。このケースでも、私たちは、つい、漢字が意味を表記しているように考えてしまいがちだが、この天は、例えば、天井や天汁の天や丸芳露⁴⁰³の丸と同じく外来語の音声を表記したものであり、天(天空、sky)の意味はない。

次は、鳥、鴿、磬、である。この三者は恐らく同類の情報を伝えているはず、という見当位は誰しもつけられるであろう。

ここでは、鳥や鴿は、漢字の表意機能が利用されており、字面の通り、鳥や鴿⁴⁰⁴と取ってよい。天磬船では、鳥という情報を伝えているはずの漢字「磬」は、字形に意味がなく字音に意味があるため、理解するには、先の天同様、言語の知識、特に異文化の語彙(外来語)の知識がある程度必要である。磬の船が水に浮かぶことはないことから、意味表記ではないことがわかるが、茂在氏は、磬について、次のように述べている⁴⁰⁵。

しかし「イワ船」のイワを、文字どおり「岩・石・磬」の意に解釈するには、疑問が最後まで残る。岩の船は水に浮かばないからである。これらの言葉は「いい伝えられた言葉」を、単に文字に表現して記録したもの、つまり「当て字」と考えるべきなのではないだろうか。

したがって問題は、アマノイワフネという表音である。……イワという発音に、何か手がかりはないかどうか。とくにイワが何か船にかかわるとすれば、それが第一歩となるはずである。

私は、あるとすれば、黒潮によって移入した南方系の言語であると考えてきた。したがって、できるだけ古代に近い、古い南方系の諸語属を、いちいちあたってみることにしたのである。

私は、……。

はじめのうちは自分の体験に照らして、東南アジアなどの古語を検索していった。しかし、アマやイワの表音で、船や海の意味にかかわる言葉はなかなかみつからない。ところが、マレー・ポリネシアン語族に入ったとたん、何か目からウロコが落ちるかのようになり、つぎつぎと適合する表記がみつかったのである。

マレー・ポリネシアン語族というのは、南太平洋地域に広く分布する言語である。アウ

ストロネージア語とも呼ばれ、ニュージーランド語やサモア語、ハワイ語などがふくまれるが、これをひっくるめてポリネシア語と呼んでおこう。地理的には、西はだいたいニューギニア、南はニュージーランド、東はイースター島、北はハワイ諸島という広大な地域である。

現代ハワイ語の辞書のなかに、古代ポリネシア語などの表音が併記されている一冊があった。そのあるページに、めざす言葉があった。イワ'IWA がみつかったのである。そしてその意味は、軍艦鳥であった。

'IWA=Frigate or man-of-war bird.

イワ=軍艦鳥。これは単なる偶然だろうか。鳥はむかしから、航海に欠かせない動物であった。そのなかでもとくに軍艦鳥は、「航海の案内鳥」として、むかしからポリネシア人によって、南方で利用されていた鳥である。

この鳥は、巣を島の木の上に作る性質がある。朝早く島を飛び立って、夕刻に島へ帰り、昼の間は長時間海の上を飛びつづける性質をもっている。このため、朝夕の飛行方向から、島の存在を船乗りに知らせてくれるのである。主として熱帯の海に住み、カツオドリなどの海鳥から食物をまきあげる習性がある。黒色、翼が長く、片羽約五十センチ。全体としては日本の鵜によく似ている。

もしイワフネを「軍艦鳥の船」と解するならば、「軍艦鳥によって方向を定める船」の意味になるだろう。『古事記』のイワフネ、『日本書紀』のイワクスブネのイワは、こう考えると、きちんと船に符合する言葉である。

鳥をもちいた航海術は、古代から広く行なわれていた。日本においては、軍艦鳥の役割はカラスなどにかえられた。陸が見えないほど遠い沖に船が出ってしまった場合、カラスなどを放してやって、それが飛んで行く方向、すなわち陸地の方向をみつけ出したのだと考えられている。

ここで問題となるのは、イワをハワイ語の'IWA にそのままおきかえていいのかどうかである。かりにイワを「正確」にローマ字で表^マに^マするとすれば IWA となる。この IWA と'IWA とは、完全に同じ発音ではないのである。

IWA の前に ' がついていても、日本語で書けばイワとしか書けないのだが、専門的にはこのイは声門閉鎖音がともなう「イ」である。これをさらに古代ポリネシア語にまでさかのぼると、KIWA つまりキワという発音になる。だから、イワフネではなくて、キワフネでなければならない、という議論が生ずるであろう。

しかしキワがイワに変わったのは何世紀ごろか、また、たとえ「記紀」以前にキワだったとしても、当時の倭人にはイワとしか聞きとれなかったのではないか、などの問題提起

をし……。

茂在氏は、問題提起、と控え目な表現をしているが、その推論は、言語面からの研究に突破口を開く画期的なものであった。ここに引用した知見は、古代日本語における船舶の名称の解明にとって極めて重要な手掛かりなのである。

4-2. トリノイワクスブネ

こうして、天鳥船、天鶴船、天磐船、が、アウトリガー・フロートを持ち、陸地や島の方向を確認するための鳥を舶載する船舶、という意味であることがわかった。

さて、天鶴船は亦名であり、元の名は、熊野の諸手船、であった。小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、「熊野の諸手船」に「熊野の木材で造船した、櫓を両舷に多く付けて漕ぐ船。早く走る船。この熊野は島根県八束郡熊野神社の熊野とも和歌山県の熊野ともいうが、木材の産地ということからみて後者か」と頭注を付している (p. 117)。

櫓が多い、とか、漕ぐ、とかが、どうしてわかるのか、明白ではない。恐らく、船のことだから櫓を使うはず、漕ぐはず、位の発想で解釈しているのであろう。また、速度が速い、は、先の「天鶴船」に付した頭注「天上を鳩のように早く飛ぶ意。「鶴」は享和本『新撰字鏡』に「也万波止」。記は天鳥船神を遣わす」との整合性を考慮して書いたものであろうが、鶴がさして速く飛ばない鳥であることは前述の通りである。速度の速さを比喻したければ、他の鳥の名を例に挙げるのが普通であらう。

櫓は、一般に、水を掻いて水面上の船舶を進める道具であるが、天上でも有効なのであろうか。二つの頭注の解釈に従えば、熊野の諸手船は水上用の船、天鶴船は天上用の船、ということになりそうだが、同じものであるのに、用途にこれほど大きな乖離があることはどう説明するのであろうか。

小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、何も書かないよりは何か書いた方がよい、という位の発想で解釈をしている可能性があるが、字面に基づいて何か書くという程度では、誰にとっても、さほど理解の助けにならないのではないだろうか。

『日本国語大辞典』は、諸手船を、「(「もろた」は諸手または両手の意) ①多くの櫓のついた早船または、二挺櫓の早船。②島根県八束郡にある美保神社の諸手船神事に用いるくり舟」と説明し、また、諸手船神事の項で、「船員船子らが樟(くすのき)をえぐったくり舟に乗り、海岸で神官が擬装した事代主神に拍手をし帆をかけて六回港内をこぎ競う」と説明している(第十九巻、p. 389)。

茂在寅男氏は、「諸手」の字を「モロタ」と読ませているが「モ・ロト」の当て字ではないか、と考えた。ポリネシア語では、「ロト」は「内海」であり、「モ」は「……に使うためのもの。何々用の」であるから、「モ・ロト」は「中海用の」という意味になる、というわけである。

個々の単語の意味は、そうではあるが（mō for; for the use of と roto lake; swamp）⁴⁰⁶、茂在氏は、「ロト」という単語に拘泥するあまり、直感的にも、そのまま「モロ・タ」で意味を切り分ければよいところを「モ・ロト」と切り分けてしまった⁴⁰⁷。

茂在氏は、諸手船に関する最も信頼できる情報として、その著書に美保神社社務所発行紙『美保』（昭和54年9月20日版）の「素朴ななかに精緻な技法・刳舟の倂保つ諸手船」を引用しているの、ここに再録し、目を通しておきたい⁴⁰⁸。

船体は、大きな樅（もみ）材の中を刳った二本のオモキ（主材）を、胴部がふくらんだ凹円形になるように漆で接合し、船釘で止めてある。さらに船首にツライタ、船尾にトコイタを張り、両舷側を二本の太い船梁で支え、がんじょうな構造をなしている。

諸手船は、本来樟（くす）材の単材式刳船であったと伝えているが、用材が不足し、二本のオモキを接合する方法、オモキとオモキの間に補助材（チョウ）を入れる造船法となり、用材も樟から樅に変わってきた。

しかし、……。

現在の諸手船が古型の刳船のおもかげをよく保持し、耐波性・高速性および乾湿に耐えることに工夫されていると認められるのは、たとえ古風に見えても、優れた技法によるものと注目しなければならない。

諸手船の……。

諸手船の名称については諸説あって、目下のところ、「諸人の手によって漕がれる船」の意で、原始的な刳舟から、あるていど進んだ構造船とする見方が有力である。文献上の諸手船の最古の例は、日本書紀の国譲りの条に見える、熊野諸手船である。

オモキとは、「主木」のことで、「丸木船」の一種である。一本の丸木でこれだけの用材を求めるのは困難であるため、二本の丸木を準備し、一本で船を縦割りにした半分だけを刳り抜いて作り、もう一本で対称の形のオモキを作り、この二本のオモキを接合して、船底を含む船体の大部分を形作り、これに、船首にはツラ板、船尾にはトモ板を付け、さらに船バリ、船ブチの取付けをして形を作り上げる。船の寸法は、約6メートルが標準である⁴⁰⁹。

茂在氏は、船舶に対する深い造詣に助けられて、諸手船は中海用の船である、と一見無難に結論づけたが、それを導き出した言語的考察が間違っていることは、指摘し、正しておかねばならない。

この問題を解くには、言語の知識がもう少し必要である。具体的には、極めて簡単なことであるが、カヌーを、ハワイ語でカウ（kau）と呼び、マオリ語でタウ（tau）と呼ぶ、ということを入念に入れておけばよい⁴¹⁰。

「諸手船」の「手」は、手（tau）という名の船であり、「船」は理解を助けるための類名であ

る。そして、「諸」^{モロ}とは、「しっかりと結びつける」の意味である (molo. vt. to tie securely)⁴¹¹⁾。全体で、オモキを嚴重に連結してできた手^タ (tau) という船、の意であることは、おわかりであろう。

ここで、言語的考察が一部間違っているが、茂在氏が船材について述べた文章をもう一つ見せておきたい⁴¹²⁾。

……アマノイワフネとは、ポリネシア語的に解釈すれば、「アウトリガー付きカヌーの鳥船」ということになる。

かんたんに鳥船と書いてしまったが、前にも述べたように、むかしの航海術では鳥を切り離して考えられなかったらしい。福岡県の珍塚古墳の壁画には、船首に鳥がとまっていることや、「記紀」には数多くの「鳥船」の語が出てくるので、おいおい理解されるものと思う。

つぎに『古事記』の「鳥之磐楠船」についてである。『古事記』には、つぎのように出てくる。「鳥之石楠船神、またの名は天鳥船といふ」

天鳥船についてはつづいて述べるが、この「楠船」が問題である。私は現在の段階では、あとであげる各種言語の混交合成の例から、これを日本語の楠で造った船と考えている。ひとつには「楠」の字がそれ自体、「クスの木」という強い意味を指し示すこともあり、楠が船材に適していることもあって、右のように考えるしだいである。

したがってイワを「鳥」とポリネシア語義で解釈すれば、「楠製の鳥船」となる。ただしこのとき、正確にはトリノイワクスブネであるから、「トリの楠製の鳥船」となって、鳥が二重になってしまう。

このようなことは、……。

しかしここで、さらにもう一段深く掘りさげた考察も、できるのではないだろうか。私はトリという表音に注目したのである。

古代ポリネシア語で「トリ (TOLI)」というのは、現代ハワイ語では「コリ (KOLI)」に変化している。その意味は「木や蜜柑の皮をむく。木の表面を薄くけずって形を整える」という意味である。

この解釈でいくと、「トリノイワクスブネ」は「楠の表面をけずって形を整えた船」という翻訳も成り立つ。このかぎりでは少なくとも、「磐の船」とか「石の船」など、水に浮かべる実用船としてありえない解釈よりも、よほど現実性がある。

また、「磐のように堅い楠」などもありえないのである。楠の木には楠の木独特のやわらかさが、最後まで残っている。コクタンやリグナンバイタという木ならばともかく、あくまでも「磐のように堅い」の形容は、楠に関するかぎり不自然と考えるが、読者のご意

見はどうであろうか。

こうなると、イワクスブネの別名「アマノトリフネ」は、「きをけずって造ったアウトリガー付きカヌー」となって、これもたいへんスムーズである。とくに無理のない0解釈であろう。

どこが間違っているか、おわかりになったであろうか。

茂在氏が、鳥が二重になってしまう、と考えた個所において、「トリノ」は、「フネ」にかかっているのではなく、「イワ」にかかっている。表記をよく見ればきちんと見て取れることであるが、「トリノフネ」ではなく、文字通り「トリノイワ」という意味なのである。

茂在氏は、toli (koli. vt. To whittle, pare, sharpen, peel; to trim, as a lamp or the raveled edges of a dress; to shave, as hair)⁴¹³という単語に拘泥するあまり、「木や蜜柑の皮をむく。木の表面を薄くけずって形を整える」という意味を提示し、トリノイワクスブネのトリを「楠の表面をけずって形を整えた」と解釈したり、アマノトリフネのトリを「きをけずって造った」と解釈してしまった。

私たちは、既に、天鳥船、天鵠船、天磐船、の三船の意味を解いている。天鳥船の鳥は、文字通り、鳥なのである。

茂在氏が、天鳥船の意味と他船の名称の意味とを整合的に捉えられなかったことは、惜しいことであるが、それ以上に惜まれるのは、「木の表面を薄く削る」程度では、よほど恰好な木材を見つけて来ない限り船は滅多に造れないこと位は承知のはずであるのに、その知識を検証に応用しなかったことである。茂在氏は、天鳥船は木を削って造るが、天鵠船や天磐船は木を削らずに造っている、とか、天鳥船にとって木を削ったことは重要だからわざわざ言及しているが、天鵠船や天磐船にとって木を削ったことは重要ではあるものの一々そのことに言及していないだけである、と考えているのであろうか。

「磐」は、適切な言語の知識がなければ、「磐」と誤解するのは必至であるが、実は、『記』『紀』の一部の単語には、そのような誤解を避ける工夫が凝らされているのである。「鳥^ウ之^ノ石^{イシ}楠船^{フネ}」、「鳥^ウ磐^{イシ}櫂^{カヌー}船^{フネ}」⁴¹⁴という表記は、「石/磐」を石や岩の「石^{いわ}/磐^{いわ}」ではなく鳥の「石^{イワ}/磐^{イワ}」にどうあっても紛れなく理解してもらうために、冗長と承知の上で、「鳥^ウ之^ノ鳥^ウ」という情報を敢えて冠したものであるが、後人は、書かれたことの意味を取ることもできなかった。

情報には、一般に、目で受容するもの（以下、視覚情報）と耳で受容するもの（以下、音声情報）の二種がある⁴¹⁵。時空を越えた情報の伝達には、電話やテープレコーダがない時代にあっては、視覚情報を使うしかないが、視覚情報は、さらに、文字情報と非文字情報（図像や造形など）に大きく分けられ、文字がなかった頃は、非文字情報が利用された。

唐古^{からこ}・鍵遺跡^{かぎ}（奈良県磯城郡田原本町）の弥生土器の線刻舟の前方には鳥が描かれている。

東 殿塚古墳 (奈良県天理市) の円筒埴輪には、三隻の大型船の線刻画が描かれ、2号船は、ひがしとのづか 舳先に鳥が描かれている。めづらしづか 珍敷塚古墳 (福岡県浮羽郡吉井町) の壁画には、舳先に鳥が大きく描かれている。

古代の日本において、一部の情報は、非文字情報と音声情報の二種の媒体で伝達されている。このケースで言えば、人々は鳥を船に乗せて航海した、という情報が、土器や壁画に彫られた非文字情報と、語部によって代々引き継がれ、後に『記』『紀』などの文字情報に変換された音声情報に共通して保存されているのである。

古代日本語において、このような、鳥を舶載する船舶は、他にもあるのだろうか。

5. 亀 甲

『古事記』(中巻、神武天皇)に、「故、從其国上幸之時、乗亀甲為釣乍打羽拳来人、遇于速吸門」という記述がある。

この一文は、一般に、「そして、その国から上っていらっしやった時に、亀の背に乗って釣りをしながら袖を振って来る人に、速吸門で出会った」⁵⁰¹⁾、「そして、さらにその国からお上りになった時、亀の甲に乗って釣をしながら左右の袖をはばたいて来る人に、潮流の速い海峡の速吸門でお会いになった」⁵⁰²⁾と口語訳されている。

この物語は、『日本書紀』(巻第三、神武天皇、即位前紀)にも登場する。

原文は、「天皇親帥諸皇子・舟師東征。至速吸之門。時有一漁人、乗艇而至」であり、「天皇は自ら諸皇子・舟軍を率いて、東征の途に就かれた。速吸之門に着かれた時に、一人の漁師がいて、小舟に乗って近づいて来た」と口語訳されている⁵⁰³⁾。

『古事記』の「亀甲」は、『日本書紀』では「艇」と記述されているが、両者は同じものである、と考えてよい。にもかかわらず、これまでは、『古事記』の「亀甲」を、例えば、「亀の背」や「亀の甲」と解釈し、『日本書紀』の「艇」を、例えば、「小舟」と解釈してきた。両者の意味に乖離があることが見えていても、「亀甲」が何を意味するのかがわからず、手の付けようがなかったのである。

『日本書紀』は、船舶という情報を伝えている。『古事記』の「亀甲」と、『日本書紀』の「艇」とが同じものである以上、「亀甲」は、決して、亀あるいは亀の背ではなく、船舶なのである。つまり、「亀甲」という船なのである。

先に、言語の知識……具体的には、極めて簡単なことであるが、カヌーを、ハワイ語でカウ(kau)と呼び、マオリ語でタウ(tau)と呼ぶ、ということを手に入れておけばよい、と述べた。そして、tauが古代日本語で用いられていた例として、諸手船の手を挙げた。ここでは、kauの例を見ておきたい。

古代日本語では、kauは、例えば、『万葉集』では、「小/乎」と訳されるが、訳語の表記が

一文字で、読みも一音であり、わかりにくく、不安定である。そこで、よりわかりやすく安定したものにするために、類名を加えて、「小船」や「乎夫祢」と表記されている。

「甲」は、「小^コ/乎^コ」と異なり、長音で、類名を付さないが、その意味は、もうおわかりであろう。『古事記』のこの物語では、「亀+甲」という形式で、複音節語の後部に置かれている。言わば、「亀カヌー」というような表記である。

『古事記』の「亀^{コウ}甲」が船であることは、自明である。加えて、『日本書紀』も「艇」という情報で船であることを明示している⁵⁰⁴。『記』『紀』ともに、船であることを明示しているにもかかわらず、後世の人々は、海の民の言語や文化についての知識を欠くために、「亀甲」を船に解釈することがどうしてもできなかった。

『日本書紀』（神代下、第十段、一書第一）に、竹籠^{たけのこ}という単語がある。

竹籠^{たけのこ}は、情報がやや重複する形ながら、「堅間」を竹製の籠^コ（kau）とはっきり説明したものである。籠という漢字は、龍に竹冠を付したものである。海の民は、船を龍と見なし、船を龍舟や龍船、さらには、略して龍と言うことがある。龍は、想像上の動物であるため、『日本書紀』の編纂者は、龍という字を避けつつもコ（kau）という音声情報と、籠（舟/船）という意味情報を伝えられる表記として、籠という漢字を採用したのである。籠は、船材に竹を用いていることを反映し、kau を書き記したもののなのである。

『日本書紀』（神代下、第十段、正文）にも、無目籠、という船があり、「籠」は、古訓はカタマであるが、コとも訓む。小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、「所謂堅間は、是今の竹籠^{たけのこ}なり」を引いて、「カタマは竹籠^{たけのこ}の意である」と説明するが（p. 156 頭注8）、「竹籠^{たけのこ}」を「竹籠^{たけのこ}」と言い換えるのは、間違っている。両者は、名称も形状も異なる全くの別物である。「竹籠^{たけのこ}」の訓注が理解できないのは、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994に限ったことではないが、言い換えるのであれば、竹籠^{たけのこ}とは竹籠^{たけのこ}の意である、とすべきであった。

『古事記』の編纂者は、なぜ、わざわざ籠^{かご}と訓注を施したのであろうか。それは、籠^{かご}と読まれるのを恐れたからである。そして、籠^{かご}という読みでは間違いだからである。

訓注は、重要な情報を提供している可能性が高く、よほどの理由がない限り、敢えて無視しない方がよく、理解できない場合には、わからない、と言えばよい。このケースで言えば、籠^{かご}と籠^{かご}との間に等号を引くことが如何に魅力的に見えても、思いとどまるべきであったが、人々が「竹籠^{たけのこ}」の解釈に苦しむことは、もはやない。

以上の通り、古代日本語において、kau は、後に類名が続く場合には「小^コ/乎^コ」と表記され、単語の末尾に置かれる場合には「甲^{コウ}/籠^コ」と表記されていることがわかった。そして、亀甲が、亀の甲^{コウ}（kau）、言わば、亀のカヌー、であることがわかった。

亀は、船舶の一部と見なすには、異質な要素であるが、亀の甲^{コウ}（kau）という船とは、一体

どのような船なのであろうか。

前述の通り、非文字情報と、後に文字情報に変換された音声情報に共通する情報は、人々は鳥を船に乗せて航海した、ということである。そして、船名を構成する動物は、鳥である。そうすると、この亀は、鳥と解析するしかない。つまり、私たちにとって、亀とは、通常、爬虫類の亀であって鳥類の亀を意味することはないが、古代日本語ではある種の鳥を亀と呼んでいた、と解析せざるをえない。

古代人が鳥を亀と呼んだ例は、古代日本語以外にも存在するのであろうか。

例えば、古代英語では、turtle は、turtledove の一般的な略称であった⁵⁰⁵⁾。

“Turtle” was a common archaic English shortening of the name “turtledove.”

turtledove は、通常、キジバトと訳されるが⁵⁰⁶⁾、小論では、亀鴿と訳しておく。そうすると、全称の turtledove/亀鴿を上略した形が dove/鴿で、下略した形が turtle/亀であることが容易に見て取れる。亀鴿は、考察の便宜のため試みに訳したものであるが、古代日本語には、上略した形の鴿や、下略した形の亀が存在したのみならず⁵⁰⁷⁾、全称の亀鴿も存在したのではないだろうか。ハワイ語には、kuhukukū という単語があり、鴿もしくは亀鴿を意味する (kuhukukū, n. Dove, turtledove)⁵⁰⁸⁾。kuhukukū が、turtle と訳された例を挙げておく⁵⁰⁹⁾。

The voice of the turtle, (archaic for turtledove), ka leo o ke kuhukukū.

茂在氏が述べる通り、海の民は、外洋航海で、目標の陸地や島が視界に入っていない場合に、あらかじめ船に乗せておいた鳥（特に、ハトやカラスなどの陸鳥）を飛ばすのである。鳥が飛び去るなら、その方向に陸地や島があることがわかり、船に戻って来るようであれば、近くには陸地や島がないことがわかる。

外洋船に鳥を積み込むことは、乗員が生きて再び土を踏むことができるかどうかにかかわる極めて重要な行為であった。その重要度の高さは、鳥の舶載が非文字情報と音声情報（後の文字情報）の二種の媒体に登場することからも窺い知れるが、例えば、天鳥船を構成する三要素の中の一要素を鳥が占めることから理解できよう。

6. 垂見/垂水

『日本国語大辞典』（第二版第八巻）に、次のような説明がある（p.1168）。

たる-み【垂水】

①【名】垂れ落ちる水。滝。瀑布（ばくふ）。

②○兵庫県神戸市の区名。昭和二年（一九四六）須磨区から分離して新設された。市の西部にあり、明石海峡に臨む。塩屋・舞子ノ浜などは、古くから白砂青松の景勝地として知られる。同五七年に西区を分区。

○大阪府吹田市の南西部の地名。

滝や瀑布の水を、垂れ落ちる、と説明するのは、いかにも不可解である。

滝や瀑布の水の動きは、垂れ落ちる、ではなく、流れ落ちる、と形容した方が良いのは、誰しもわかっているはずである。流れ落ちる水、の方が良いとわかりながら、垂れ落ちる水、と説明するところに、漢字がわかる者が、つい、漢字の文字面に囚われて解釈をしてしまう（漢字の字形が示す意味に執着して融通がきかなくなってしまう）悲しい習性が顔をのぞかせている。解釈の過程で、語感の極めて鋭い一部の人が腑に落ちないと思うことがあっても、代案がなければ、漢字の絶大な表意力の前に、「垂」と書いてあるから「垂れる」で良いではないか、と不審の思いを喪失してしまうのである。

海の民の言語や文化に由来する言葉は、私たちを含め、陸の民には、海の民の言語や文化の知識がないため正確に理解することができないものがある。小論で、私たちは、理解に必要な知識（装備）を入手してきたが、そろそろ、垂水の垂は、漢字の字形ではなく字音に意味があること（漢字がひらがな/カタカナのように用いられていること）、垂は、当時の人々が何と書いていた単語を書き記したものであるのか、垂や垂見/垂水が何を意味するのか、が理解できるようになったのではないだろうか。

漢字しか書けない者は、漢字しか書けないが、今日、ローマ字で taulua（船-二つ、双胴船）と表記する単語を、漢字しか書けなかったころの古代日本人は、漢字で垂と書き記したのである。

志貴皇子の歌の原文にある垂見とは、taulua（船-二つ、双胴船）を見かけるところ、のことであり、垂水もほぼ同義で、taulua（船-二つ、双胴船）がいる水面/水域、の意である。元は、普通名詞であるが、taulua（双胴船）が見えるところ、taulua（双胴船）がいるところ、という情報を伝えるために「タルミ/たるみ」と長年言い慣わされると、それが定着し、固有名詞となる。順序として、「タルミ/たるみ」という音声^{たるみ}が先にあって、それを書き記すために「垂見/垂水」という表記が後からできたことは、言うまでもない。「タルミ/たるみ」を表記する時に、taulua（船-二つ、双胴船）を見かけるところ、と捉えた者（志貴皇子）は、垂見、と書き記し、taulua（船-二つ、双胴船）がいる水面/水域、と捉えた者は、垂水、と書き記したのである⁶⁰¹。

各地に、たらみ、たれみ、たろみ、という地名もあるが、その由来も同様に考えてよい。また、鹿児島県中部、大隅半島の北西部に、鹿児島湾^{たるみず}に面して垂水という地名があるが、その由

来も同様に考えてよい。

異文化の語彙 (外来語) は、異文化の語彙 (外来語) の知識がなければ、正確に理解できない。例えば、「はははほっとにした」「いまぼとがいたね」のような文章は、一部に異文化の語彙 (外来語) が用いられていることを知らなければ、間違った文章、手直しの必要な文章と誤解してしまう⁶⁰²⁾。また、例えば“請給我手紙”という中国語は、日本語の知識だけでは正確に理解することができないし、逆に「油断一秒、怪我一生」という日本語は、中国語の知識で何の不自由もなく理解できるが、その理解は日本の意味とは全くズレたものとなる⁶⁰³⁾。

「石」も異文化の語彙 (外来語) の知識 (海の民の言語や文化の知識) がなければ、正確に理解することができない。私たちは、理解に必要な知識 (装備) を入手してきたが、志貴皇子の歌の意味は、そろそろおわかりであろう。

全称を「天磐船」、略称を「岩船」や「石」という船が、ある程度の速度で走っている、垂見 (垂水) 地区……、となろう⁶⁰⁴⁾。

ここで、石走る、が登場する歌をもう少し見ておきたい。『万葉集』29の歌である。

近江の荒れたる都¹を過ぎし時²に、柿^{かき}本朝^の臣^{あそ}人^み麿^{ひと}の作れる歌
 …… 石^{いはし}走る¹⁵ 淡海^{あふみ}の国^のの 楽浪^{きざなみ}¹⁶の 大津^の宮^に ……

中西進1978は「1 近江大津宮。アフミは淡 (あは) 海の意。滋賀県大津市。天智六年 (六六七) 遷都、天武元年 (六七二)、壬申の乱により、廃墟となる。2 年次未詳。次の黒人の歌、人麿の二六四、二六六と同時か。……15岩の上をほとばしる水の形容。16楽浪郡」と語句に注を付し「……岩ばしる近江の国の楽浪の地の大津の宮に……」と口語訳している (pp. 63-64)。原文は、…… 石走 淡海國乃 樂浪乃 大津宮尔 ……。 (同書 p. 64)

中西進1978の口語訳は、投げたようにも見えるが、今や、私たちは、柿本人麻呂は、岩の上をほとばしる水、と脈絡が (認められ) ない出出しで歌を詠んだのでは決してなく、鳥の石 (磐) を舶載する天磐船や岩船、石が走っている、淡海国の……、と詠んだのだな、ということが理解できるのではないだろうか。

『万葉集』3025の歌も見ておきたい。

石^{いは}ばしる¹ 垂水^{たるみ}の水^のの² 愛^はしきやし³ 君^{きみ}に恋^こふらく⁴ わが情^{こころ}から

中西進1981は「1 垂水 (滝) の形容。2 水の走る一ハシ (愛し) と接続。3 かわいい。原文

「早」の用字は水を意識。4「恋ふ」の名詞形」と語句に注を付し「石の上をほとぼしる滝の水が走る、はしき君に恋することは、私の心からよ」と口語訳している（p. 138）。原文は、石走 垂水之水能 早敷八師 君尒戀良久 吾情柄。（同書 p. 138）

「石の上をほとぼしる滝の水が走る」は、作者が目にした光景を今一つ想像しにくく、ピンボケしているのではないかと感じられる解釈である。作者の気持ち（原文の意味）ともズレている可能性がある。また、「水の走る—ハシ（受し）と接続」と注釈しているが、実はそうではなく、「愛し」は、そのまま意味を変えることなく「水」と「君」の両者にかかっている、と考えられる。

石走るは、石（という場所・実間の上）を（何かの液体が）流れる・走る、という意味ではなく、文字通り、石が走る、という意味であろう。そして、垂見も、文字通り、垂/タル/たる/taulua（双胴船）がよく見られるところ、の意味であろう。歌の意味は「石（岩船/天磐船）が走っている、垂見は水面や水流がいつも愛らしいくらいに穏やかだ、君もいつも穏やかに愛らしい、君に恋をしているよ、私の心から」という意味であろう。

7. おわりに

冒頭で（1. はじめに）、私たちを含め、後世の人々は、自分が想像するほど海の民のことを知らない可能性がある、と述べたが、実際のところ、私たちは、無知とも言えるほどに海の民のことを知らない。

私たちを含め、後世の人々は、海の民の言語や文化についての知識を継承しなかったため、「石はしる」や「垂見」「垂水」の意味を正確に取ることができない。適切な海の民の言語や文化についての知識を欠いたままでは、当然ながら、海の民の言語や文化を適切に理解したり説明することができないのである。

私たちは、新たに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識、という装備を持つことで、先人が持たなかった視点を持ち、先人が理解できなかったことが理解できるようになった。逆に言えば、仮に、私たちに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識（装備）がなければ、先人と似たようなこと、言い換えれば、第三者からは、牽強附会、と思われかねないようなことしか書けなかったものと思われる。今日の日本語の中に異文化の語彙（外来語）が存在するように、古代の日本語の中にも異文化の語彙（外来語）が存在することが、おわかりいただけたであろう。どの言語にも共通するが、日本語も、一層ではなく、多層なのである。海の民の言語や文化は、日本の言語や文化の基層の一部なのである。古代の日本社会には多様な言語や文化があったこと、即ち、古代の日本社会における言語や文化の多層性は、是非とも視野に入れておきたいものである。

海の民の視点、具体的には、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を加えることで、古典の理解や解釈が、より豊かに、より正確になる。私たちは、古代の日本語に取り組みの、いわゆる日本語の知識にせいぜい中国語や朝鮮語の知識を加えただけのような姿勢でやってきたが、ポリネシア語が解析/研究上考慮すべき言語であることを否定できないことがはっきりしたのである。学者や研究者は、政治家や評論家ではないのだから、外来語は想定外だった、と恣意的に無責任なことを言うのは、やめておきたいものである。

小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を入手することで、私たちの視点を海の民の視点に少しでも近づけ、「石はしる」は「^い石は^しる」、つまり「天磐船/岩船^いがはしる」の意であること、「垂水」は「^タ垂^ル-水」(taulua-水、双胴船がいる水面/水域)の意味構造であること、などを解明することができた。

小論は、これまで持つことのなかった、異文化の語彙(外来語)という視点を加えることで幾つかの問題を解くことができた。古代の日本語の問題をより正確に解いたり、古典をより正確に理解するのに、外国語、特にポリネシア語等の周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

【注】

- 101) 『広辞苑』第五版には、次のような解説がある (p.2880)。
 わらび【蕨】イノモトソウ科のシダ。山地の日当りのよい乾燥地に群生。早春、地中の根茎からこぶし状に巻いた新葉を出し、これを「さわらび(早蕨)」という。食用。根茎から蕨粉をとる。
- 102) 中西進1980に限らないが、原文表記の垂^見では、意味が取れないため、垂^水と表記を変えることで、垂れる水・滝、に何とか解釈して、しのいでいるように見受けられる。
- 201) 『古事記』(下巻、仁徳天皇)の原文表記は、加良奴(荻原浅男、鴻巣隼雄1973.p.289)、加良怒(山口佳紀、神野志隆光1997.p.304)。
- 202) 茂在寅男1984.p.32。
 「枯野」等の解釈に外来語(異文化の語彙)という観点を試みたのは、茂在氏が初めてであろう。
- 203) 筆名。本名、政行。
- 204) これは、管見に入った最も有用な知見である。井上氏は、ここでは慎重に、kau=to place, to set, rest=canoeと説明しているが、自身のHP(夢間草廬、<http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/>)では、kau=canoeとしている。Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986には、「kaukahi. n. Canoe with a single outrigger float」(p.135)、「kaulua.nvi. Double canoe」(p.137)の例があるので、kauをcanoeと理解するのに問題はない。修飾語がなくとも、「kau」だけで使われていたであろう。
 引用文は、KAMAKURA OUTRIGGER CLUB、<http://leiland.com/outrigger/column.shtml?kodai.html>. Copyright (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC.に掲載されていたが、今は削除されている。
- 205) 寺川真知夫1980.pp.141-142。引用の際の省略箇所は、……、で示す。以下同じ。
- 206) 小島憲之、木下正俊、東野治之1996.p.390は、次のように注をする。
 伊豆手船—伊豆地方で建造された船をいうか。四四六〇の「伊豆手の舟」との異同は不明。
 『令集解』(菅繕令・古記)に船艇の代表に『播磨国風土記』逸文に見える伝説的丸木舟の名

- 「速鳥」と並べて「難波伊豆の類」とも見える。
 寺川真知夫1980.p.142は、引用の通り、大型船か、と推測する。正しい推測である。
 原文：佐吉母利能 保理江己芸豆流 伊豆手夫祢 加治登流間奈久 恋波思気家牟。右、九日大伴宿祢家持作之。（同書同頁）
- 207) 小島憲之、木下正俊、東野治之1996.p. 437は、次のように頭注を付している。
 伊豆手の舟→四三三六（伊豆手船）。歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる。
 原文：保利江己具 伊豆手乃舟乃 可治都久米 於等之婆多知奴 美乎波也美可母。（同書同頁）
 小島、木下、東野諸氏は、窮余の策をとったのであろうが、歌の趣では、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤りではないものの、研究方法として許容されない。後述するが、文字表記に基づくなら、「手乃」は「手」よりも大きいので、小島、木下、東野諸氏は、逆に解釈をしてしまっている。趣は、主観的要素に左右される余地が大きく、基準として使えないことが改めてはつきりした。解析を日本語一視点のみに頼るのは、危険であり、必要性もない。
- 208) 小島憲之、木下正俊、東野治之諸氏は、一文字多い/少ない、一音節多い/少ない、という程度の説明に満足せず、果敢にも、歌の趣から、手乃を手よりも小型か、と誤った推測をしたが（注207参照）、これでは、恐らく、小島、木下、東野諸氏は、例えば、菊は普通（サイズ）の菊で、菊乃は大輪の菊という意味の違いや、幸は普通にいう幸せで、幸乃は大きな幸せという意味の違いもわからないのではないだろうか。乃は、いわゆる海の民の言語や文化についての知識がなければ、正しく理解できないが、私たちは、今後「手と手乃」の大小や「菊と菊乃」の違いを論じるのに、趣に頼る必要はもはやない。
- 209) 『日本書紀』（巻第二、神代下、第九段、正文）に、「熊野の諸手船」という船がある。「諸手船」の「手」は、『万葉集』の「手夫祢/手乃舟」の「手」と同じもので、手（tau）という名の船であり、「船」は、「手夫祢/手乃舟」の「夫祢/舟」と同じもので、理解を助けるための類名である。tau（舟/船）という情報を、伊豆の知識人（たち）は、手、という漢字で書き記し、島根の知識人（たち）も、同様に、手、という漢字で書き記した、と見てよい。（4－2、トリノイワクスブネ、参照）
- 210) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995b.p. 369は、次のように注釈を付している。
 浦廻漕ぐ一津々浦々を漕ぎ巡る、の意で、熊野船の特性を述べた修飾語。
 熊野船着き一熊野船は熊野地方産の原木で製した船。その構造や機能に特色があった上に、その沿岸住民も航海技術に長じていたことで、当時、既に有名であったのであろう。巻第六の山部赤人の歌（九四四）にも「大和へ上るま熊野の船」が詠まれている。
 原文：浦廻榜 熊野舟附 目頬志久 懸不思 月毛日毛無。（同書同頁）
 青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎1980.p. 390は、次のように注釈を付している。
 熊野舟つき「熊野舟」は良材を産する紀伊の熊野地方の舟で、特異な形状であったらしい。「つき」は形状の意で、目つき・顔つきの「つき」と同じものか。上二句は序。「めづらしく」を起す。
- 211) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995a. pp. 121-122は、次のように注釈を付している。
 島隠り—この島隠ルは風待ちなどのために島陰に停泊すること。
 ま熊野の船—まは接頭語。熊野は熊野船（三一七二）としてその構造・機能に特色がある船を産し、沿岸住民も航海技術が卓越していたことで、当時既に有名であった。
 原文：嶋隠 吾榜来者 乏毳 倭辺上 真熊野之船。（同書 p.121）
- 212) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995a.p. 162の注。
 ま熊野の小船→九四四（ま熊野の船）。
 原文：御食国 志麻乃海部有之 真熊野之 小船尔乘而 奥部榜所見。（同書同頁）

- なお、「小」の字に「を」のルビをわざわざ振るからには、そのように読ませようという意図があるものと思うが、「小石」や「小島」の「こ」に読む可能性は、検討されたのであろうか。
- 213) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995b.p.464の注。
足柄小舟—足柄山で造った舟。「足柄山に船木伐り」(三九一)ともあった。逸文『相模国風土記』に、足柄山の杉材で造った舟は足が軽い、とある。
原文：母毛豆思麻 安之我良乎夫祢 安流吉於保美 目許曾可流良米 己許呂波毛倍杼。(同書同頁)
- 214) 「小船」が後人に正しく理解されていないことを知るには、「小船」とはどのような船なのか、つまり、その具体的な大きさや乗員数等を考えるとよい。注207)で、歌の趣では、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤りではないものの、研究方法として許容されない、とは書いたが、歌や文章の趣が真にわかる人には、字面は「小船」だが実際には「小」さくなかろう、と感じられることがあるのではないか。
- 215) 「kau-nui (狩野)」は、広く使われていたようである。その痕跡は、船名にはないようであるが、地名に見ることができる。狩野は、茂在氏の挙げる例であるが(茂在寅男1984. p. 20)、他にも、例えば、巨濃郡(鳥取県)、金浦(秋田県由利郡)がある。「kau-nui」との深いつながりで名付けられたものであろう。
広島県福山市金江町は、江に金(属)があることに由来するのではなく、江にkau-nui (船-大きい)があることに由来しているよう。金江町金見、金江町葦江、も、金(属)ではなくkau-nui (大型船)が見えることで名付けられたものであり、江に(稲/麦)藁ではなくwaa-lua (双胴船)が浮かんでいることで名付けられたものであろう。
また、志賀島の叶崎や、高知県土佐清水市の叶崎も、そこでは何かの願いが(いつも、よく)叶うからではなく、kau-nui (大型船)が(いつも、よく)そこを通ることで名付けられたものであろう。
山口県東部にある鹿野町は、鹿がいる野原、という特色から地名ができた可能性もあろうが、錦川上流にあり、農林業を主にしていることから見ると、kau-nui (船-大きい)用の木材を産することに由来して地名ができた可能性もあろう。
人名の狩野(かの、かのう)、加納、加能、嘉納や叶などにもkau-nuiに由来するケースがあろう。
- 216) 地名にも、その痕跡がある。例えば、田浦(長崎県福江市)は、浦(の近く)に田圃があるのではなく、浦(そのもの)にtau-nui (大型船、もしくは、tau、船)が見られることに由来する地名であろう。
また、人名の田野にもtau-nuiに由来するケースがあろう。このような事例は、今後さらに追究するならば、無数に発見しうるに相違ない。
- 301) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994の口語訳 (p. 135)。
302) 『日本国語大辞典』は、「天鳥船」を「(「天の」は美称) 鳥が飛ぶように速く走る船。あめの鳥船」と説明している(第一巻 p. 543)。
303) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994の口語訳 (pp. 117-118)。
304) 『日本国語大辞典』は、「天鴿船」を「天鳩船」と表記し、「(鳩のように速く走る船の意)「熊野の諸手船」の別名とされている船の名」と説明している(第一巻 p. 544)。
305) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994の口語訳 (p. 195)。
306) 『日本国語大辞典』は、「天磐船」を「(「磐(いわ)」は「堅固な」の意) ①空中を飛行する堅固な船。「日本書紀」では、高天原から下界に降りる際に用いた船として伝えている。あめのいわふね」と説明している(第一巻 p. 541)。
- 401) 茂在寅男1981. pp. 60-62。
402) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986は、ama. n. Outrigger float; port hull of a double canoe, so called because it replaces the float、とする (p. 22)。

- 403) マルポーロ。「丸」は、音義融合とも言える。なお、小論では、便宜上、天麩羅風に片仮名で読みを振ったが、天婦羅風に平仮名で読みを振っても、構わない。
- 404) 鳩は、ハトの総称と理解してもよく、後述する「亀鳩」の略称と理解してもよい。
- 405) 茂在寅男1981.pp. 56-59。
- 406) それぞれ、A. W. Reed & Timoti Kāretu, Ross Calman 2001. p. 45と p. 69。
- 407) 茂在寅男1981.p. 201、茂在寅男1984.pp. 71-73。
- 408) 茂在寅男1981.pp. 198-200。
- 409) 茂在寅男1981.p. 204、茂在寅男1984.pp. 76-77。
- 410) <http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/intro3.html> 入門篇 (その三)、参照。
- 411) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p. 253.
- 412) 茂在寅男1981.pp. 62-64。
- 413) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p. 163.
- 414) それぞれ、『古事記』(上巻)、『日本書紀』(神代上、第五段、一書第二)。
- 415) 触覚情報に、アン・サリバンがヘレン・ケラーの手に字を書いたことや点字がある。
- 501) 原文・口語訳ともに、山口佳紀、神野志隆光1997 (p. 142)。
- 502) 荻原浅男、鴻巣隼雄1973の口語訳 (pp. 149-150)。
- 503) 原文・口語訳ともに、小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守1994 (pp. 194-195)。
- 504) 『日本書紀』の「艇」は、洗練された言葉であり、異なる言語や文化を持つ集団にも理解してもらいやすいが、情報としては、『古事記』の「亀甲」の方が原情報を留めたものであり、古代人の言語や文化に関する情報を伝えている点で、はるかに価値が高い。
- 505) “Turtle” was a common archaic English shortening of the name “turtledove.” The Turtledove would have been a well-known European species. Any general observer might have mistaken our Mourning Dove for the Turtledove (*Streptopelia turtur*).
<http://www.towhee.net/history/earlyexplorers.html>.
(TOWHEE.NET: Harry Fuller, 243 Granite Street, Ashland, Oregon 97520)
- 506) 小西友七・南出康世主編『ジーニアス英和大辞典』大修館書店、2001、p. 2310。
- 507) 鳩については、字面の助けもあり、大きな問題はないが、亀については、知識が継承されず、字面からの誤解も加わり、正確な意味を取ることができなかった。
- 508) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p. 174.
- 509) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p. 550.
- 601) 冒頭(1. はじめに)で引用した中西進1980は、必要もないのに、原文の垂見を垂水と書き改めているが、恐らく、垂見では意味が取れず、垂水と書き改めることで、滝という解釈に何とか持ち込んだのではないだろうか。原文の表記に手を入れずに読めるなら、中西進氏もそうしたかったことであろうし、そうするよう勧めるであろう。「垂見」は、表記の通り、垂/タル/たる/taulua (双胴船)がよく見られるところ、の意味である。
- 602) 母は熱いコーヒーをもらうことにした、たったいま通り過ぎたところにパトロールカーが停まっていたね、の意。
- 603) 中国語の意味は、それぞれ、「どうか私にトイレットペーパーを下さい」「油(の供給)が一秒でも止まったら、私は自分を一生咎めます」である。
- 604) 「天磐船・岩船・石」風に並べれば「パトロールカー・パトカー・パト」となる。なお、「天磐船」「天鳥船」「天鳩船」等は、ドラスティックに「天」と略されたこともあった。「パトロールカー」が一足飛びに「パト」と略されたようなものだが、日本語は古今を問わず省略表現を好む言語であることがうかがわれる。稿を改めて述べたい。

【参考文献】

<日文>

- 荻原浅男、鴻巣隼男1973。『古事記 上代歌謡 (日本古典文学全集1)』小学館。
角川日本地名大辞典 編纂委員会1990。『角川日本地名大辞典』角川書店。
小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994。『日本書紀① (新編 日本古典文学全集2)』小学館。
小島憲之、木下正俊、東野治之1995a。『萬葉集② (新編 日本古典文学全集7)』小学館。
小島憲之、木下正俊、東野治之1995b。『萬葉集③ (新編 日本古典文学全集8)』小学館。
小島憲之、木下正俊、東野治之1996。『萬葉集④ (新編 日本古典文学全集9)』小学館。
寺川真知夫1980。「『仁徳記』の枯野伝承の形成」、土橋寛先生古稀記念論文集刊行会編『日本古代論集』笠間書院。
中西進1978。『万葉集 全訳注原文付 (一)』講談社。
中西進1980。『万葉集 全訳注原文付 (二)』講談社。
中西進1981。『万葉集 全訳注原文付 (三)』講談社。
日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部2000。『日本国語大辞典』(第二版第一巻)小学館。
三浦佑之2002。『口語訳 古事記 [完全版]』文藝春秋。
茂在寅男1981。『日本語大漂流 航海術が解明した古事記の謎』光文社。
茂在寅男1984。『歴史を運んだ船——神話・伝説の実証』東海大学出版会。
山口佳紀、神野志隆光1997。『古事記 (新編 日本古典文学全集1)』小学館。
<その他>
A. W. Reed & Timoti Kāretu, Ross Calman 2001. *The Reed Concise Māori DICTIONARY*, Literary Productions Ltd.
Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. *Hawaiian Dictionary*, University of Hawaii Press.

【付記】 本稿は、平成23年度佛教大学特別研究費の助成による研究成果の一部である。

(こう とうじ 中国学科)

2011年11月15日受理